

IV 他誌発表

「千葉県地下水水質資料集」にみる地下水の水質分布。 —パーソナルコンピュータによる水質データベースの作成と出力結果— 日野隆信¹⁾, 中西成子¹⁾, 藤代良彦²⁾: 地下水と井戸とポンプ, 27-4, 12-24, 1985

先に、編集した「千葉県地下水水質資料集」は千葉県内の飲料用地下水の水質状況を把握し、適正な地下水利用推進する目的のために県下全域にわたる約4,000件の地下水水質データが収録されている。本報では、この資料集におけるデータの収録様式の概要を述べるとともに、収録した水質に関するデータの一部をパーソナルコンピュータに収納し、データの管理と集計を試みた。

1) 千葉県衛生研究所 2) 現千葉県がんセンター

含イオウ食品から検出される天然由来の亜硫酸について。 宮本文夫¹⁾, 佐伯政信¹⁾, 原田基夫²⁾: 食衛誌, 26, 266-272, 1985

含イオウ食品中の天然由来の亜硫酸をGCで定量し、含イオウ生鮮食品から0~3.9ppm、含イオウ加工食品から1.8~39.2ppm検出した。含イオウ食品と亜硫酸処理された一般食品について3種の前処理法(通気蒸留法、通気蒸留変法、アルカリ分解法)の測定値を比較したところ含イオウ食品では前処理法の違いにより大きな差異が見られ、亜硫酸処理食品と異なった傾向を示した。この相違は食品中の亜硫酸の添加か否かの判定に有用である。

1) 千葉県衛生研究所 2) 日本シャクリー株式会社

Determination of Ampicillin Residues in Fish Tissues by Liquid Chromatography. Tomoko NAGATA, Masanobu SAEKI : J. ASSOC. OFF. ANAL. CHEM. 69, 448-450, 1986

養殖魚からアンピシリンをメタノールで抽出し、抽出液を、減圧下濃縮乾固する。残渣を、フロリジルカートリッジを用いて、クリーンアップし、高速液体クロマトグラフィー(LC)に供した。LC分析は、又クレオシルC₁₈カラムを用い、移動相をメタノール:緩衝溶液(pH 6.0)(15+85)とし、222nmで検出した。添加回収率は、0.2, 0.1ppm添加でそれぞれ73.2%, 61.5%であった。定量限界値は、0.03ppmであった。

「千葉県における感染症情報の解析方法の検討—感染症情報の図式化」 北山秋雄¹⁾, 市村 博¹⁾, 太田原美作雄¹⁾, 遠藤 明²⁾, 日本公衛誌, 32-8, 437~439, 1985

「千葉県感染症情報」は臨床医の診療の資料として、行政にあつては防疫措置の一助として、さらに衛生教育の実務上の情報等に広く活用されている。しかし、当初、感染症情報は数字のみで表現されていたため、極めて理解しにくかった。著者らは、感染症サーベイランス対象疾病20と県単独で収集している川崎病(MCLS)の発生状況を親しみやすいマークで表現することにより、1)一見して発生状況が把握される、2)データを定量化し客観的な情報として利用される、ことを考慮し、「感染症天気図」を開発した。感染症天気図は、疾病別に当該週とその前週の報告定点当りの患者数を比較し、「増加」、「やや増加」、「変化なし」、「やや減少」、「減少」の5段階に、「流行中」を加えて表現される。5段階及び「流行中」の評価方法は、過去3年間のデータから得られた平均値と標準偏差が用いられ、データの評価からプリント出力までコンピュータによって自動化されている。

1) 千葉県衛生研究所 2) 千葉県衛生部保健予防課

0歳児の麻疹様患者の発生状況。 山野登史¹⁾, 市村 博²⁾, 北山秋雄²⁾, 山辺靖子²⁾, 時枝正吉²⁾, 太田原美作雄²⁾: 千葉県医師会報, 37-4, 65~67, 1985

麻疹患者の発生は、1983年秋から増加がみられ、1984年3, 4, 5月をピークに大きな流行が認められた。患者が多発する中で、0歳児群の全年令に占める割合が約1割を越えており、隔年流行を加味しても、また経年的にみても、予防接種対象年令前の乳児の麻疹患児の増加が懸念された。そこで、0歳児、小児、妊娠可能年令女性、男子学生の血清について、血清学的検討を試み、免疫学的な背景を、さらにアンケートにより0歳児の患児発生状況の把握を実施した。結果は新生児にすら患児が発生しており、また母児免疫が消退する生後7ヶ月以降の乳児が月令を追って多く罹患している。さらに妊娠可能年令女性の抗体保有状況も17%が抗体陰性であり、母親からの移行抗体がないまま出産するケースも認められた。従って予防接種年令の引き下げや、妊娠可能年令女性の抗体陰性者に対する処置など、対策を早急に考慮する必要が生じてきている。

1) 千葉県医師会 2) 千葉県衛生研究所

千葉県における百日咳患者の発生状況。

—アンケートによる実態調査— その(3) まとめ, 山野

登史¹⁾, 橋爪 壮²⁾, 太田原美作雄³⁾, 市村 博³⁾, 遠藤明⁴⁾, 徳永 勁⁴⁾: 千葉県医師会報, 37-5, 9~12, 1985

千葉県感染症情報解析小委員会では, 1982年より3カ年の計画で, 県医師会の協力により, 1975年以降3種混合ワクチン接種中止以後の百日咳患者の増加と, その後の新3種混合ワクチン(改良ワクチン)接種開始による患者の減少という経過の中での, 県内での影響や患者の発生状況の実態についてアンケート調査(はがき利用)を実施し, 本報告がまとめである。結果は, 患者の発生が人口密集地域に偏っていること。ワクチン接種再開が遅い市町村に患者の発生がより多くみられること。月別の発生状況では年によって, 夏場がピークであったり, 夏から秋であったり, 若干違いが認められた。感染源として家族内が最も多いことが判明した。

- 1) 千葉県医師会 2) 千葉大学看護学部
3) 千葉県衛生研究所 4) 千葉県衛生部保健予防課

V 学会発表

トリハロメタン生成能と水質との関連

—千葉県の一河川をモデルとして— 中西成子¹⁾, 日野隆信¹⁾, 中山和好¹⁾, 成富武治¹⁾, 小室芳洵¹⁾, 菊池幸子¹⁾, 吉田 豊¹⁾, 相沢貴子²⁾, 真柄泰基²⁾: 第20回水質汚濁学会, 東京都, 1985, 3, 13

黒部川をモデル河川とし, 2年間行ったトリハロメタン(THM)の生成要因調査の結果から, 水質の特徴とTHM生成能との関連について報告した。

黒部川では, 上流部および流入支川ですでにTHM生成能が高く, さらに水田耕作期には著しくTHM生成能が上昇する。このことから水田土壌中に含まれる溶解性有機物質の影響も一つの要因と考えられる。

河川水中の溶解性有機物質の濃度とTHM生成能との間には高い相関が認められた。また海水の流入に伴う臭素イオン濃度の上昇は, 単位前駆物質質量当りのTHM生成量を増大させている。

- 1) 千葉県衛生研究所 2) 国立公衆衛生院

千葉県におけるつつが虫病の血清学的考察

時枝正吉, 海保郁男, 春日邦子, 酒井利郎, 北山秋雄, 市村 博, 七山悠三, 太田原美作雄: 第59回日本感染症学会, 那覇市, 1985, 5, 9

1980年頃より全国各地において, つつが虫病患者が多発している。千葉県においても1982年以降'84年11月30日現在で176名を数えている。特に血清学的診断法(間接免疫ペルオキシダーゼ反応と間接蛍光抗体法(IFIA))の二種類の検査法で131名(74.4%)が確認された。患者の発生地域は南総地域の館山, 鴨川, 勝浦の3地区が全体の80%以上であったが, 徐々に佐倉, 成田, 千葉の北総地域にも波及しつつある。また住民血清の抗体調査では22地区(館山, 鴨川地区住民成人病検診時血清)のうち抗体保有率20%以上6地区, 10%以上7地区確認された。なお, 今秋期特に患者の多発した館山N地区では26名のうち12名(46.2%)と高率であった。血清診断に用いた抗原はL細胞培養の自家製3抗原(Gilliam, Karp, Kato株)を使用してIFIA法で測定した。

食鳥肉に関する衛生微生物学的研究 第一報 食鳥処理場の汚染調査における試料採取法の比較

三瓶憲一¹⁾, 藤野訓男²⁾, 徳丸雅一³⁾, 今野純夫³⁾, 品川邦汎³⁾, 小沼博隆⁴⁾, 倉田 浩⁴⁾: 日本食品衛生学会第49回学術講演会, 東京都, 1985, 5, 17